

## 編集後記

大学の研究者の講義を高校生に行った試みの記事(中神さん他), 学会に参加した高校生がどう変化したかという報告(中山さん)が本号には掲載されています。これらの記事を読むと、私が初めて学会をのぞいた時のことを思い出します。読んでおくとそのころ渡された論文の著者たちがうじゃうじゃいてすげーと思ったものです。初めて海外で学会に参加したときも、業界の有名人と話をしたことが一番記憶に残っています。

しかし今になって思い返してみると、現在自分が行っている研究はその当時に持った疑問がそのまま持続していることから来ています。私の場合はその渡された論文によって疑問を持ちましたが、学会に参加した高校生たちもそのような疑問を持ったかもしれません。その疑問が大きければ、彼らが将来惑星科学の研究者になるでしょう。

疑問を持つためにはまず内容を理解することが必要です。惑星科学会で発表されている研究は高校生でも十分理解可能だと思います。もちろんそのためには発表が十分こなれている必要があります。「賢かったが無知だった昔の自分に対して自分の考えを説明している様子を想像せよ!」(R. P. ファインマン; この文章自体わかりやすい)を私も心掛けているのですがこれがとても骨折りであることはみなさんご承知の通りです。

「学生が聴く、日本の惑星探査の過去・現在・未来」は本号で最終回となりました。学生(賢かったが無知だった昔の自分)の方々による探査に携わっている研究者(自分)へのインタビューは探査について無知な私にもわかりやすく、毎号興味深く読ませてもらいました。みなさんにも楽しんで頂けたのではないのでしょうか。

今後もこの様な企画を通じて、こりゃ面白い、しかしなんだかこころへんがひっかかるなあ、と高校生にも疑問を持ってもらうように本紙も出来たらと思っています。

城野信一